

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

# 敬神尊皇 黎 REIMEI 明 報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 渋谷区本町1-30-18-107 <http://www.higurashi.net/> 第0019号  
護國青年會議 <http://www.gokoku.net/> 発行人/山本修三・編集人/戸出蒼流 平成17年11月26日

## 「開放中国」の正体を暴く!!

### 東トルキスタンに自由と平和を



支那によって奪われた命 1000 万人 = 50 回もの核実験による放射能汚染で 75 万人が死亡し、計画育成の名のもとに 850 万人もの胎児が強制中絶され、政治犯に仕立てられた 50 万人が惨殺された。それでも明日を生きたいと願う人々がいます。

かつて帝政ロシアがそうであったように現在の支那は、諸民族の牢獄となっている。この牢獄の中で、清王朝を建てた満州民族は跡形もなく滅ぼされ、元朝を築いたモンゴル族は「内モンゴル地区」に閉じ込められ、古代からチベット高原に独立の王国

を築いてきたチベット民族は、人口の5分の1を殺され、鉄道の普及によって大河の如く押し寄せる中京(漢民族)によってその歴史と文化は根絶の危機に瀕している。

本年10月、新疆(しんきょう)ウィグル地区(東トルキスタン)に住むトルコ系民族が、中共への同化に強く抵抗し、祖国復興を願い起ち上がった。彼らは1933年には「東トルキスタン・イスラム共和国」として、また1944年には「東トルキスタン共和国」として2度にわたる独立の経験を持っている。彼らは過去において満州族やモンゴル族やチベット族が、中共の徹底した迫害により辿らされた運命を目の当りにしており、民族差別、宗教弾圧、文化破壊、人権蹂躪を阻止するには祖国復興即ち独立の他にはないとの決意で起ちあがり、民族一丸となって闘いを始めた。

独立国であった「東トルキスタン」を大東亜戦争後の混乱に乗じて不法占領した中共は、東トルキスタンの日ちび地に現在進行形で非人道的な残虐行為を繰り返し、圧政を敷いて彼らを苦しめ続けている。具体的に言えば「計画生育」という名目で、この世に生を受けた胎児を強制中絶させ犠牲になった胎児は、およそ850万人と言われている。また中共の50回にも及ぶ核実験によって75万人もの人々が放射能被害の犠牲になっている。さらに中国共産党の意に染まない指導者・50万人が、政治犯の冤罪を着せられて処刑されている。これらの全ては戦時中のことではない。たった今こうしている間に行われている中共の暴挙である。同様の事はチベットやモンゴルでも当たり前のように行われている。この事は、人間を人間として扱わない、生命の尊さを露ほども感じない支那人による人類への挑戦である。

日本の媚中派議員や左寄りの文化人達は口を揃えて「今の中国は昔とは変わった。開放政策で自由になった」と言い、非人道的残虐行為や弾圧については、「内政に干渉してはいけない」などと馬鹿げたことを言う輩がいるが、とんでもない偽言である。支那の本質は昔も今も変わりはない、金儲けと国民の不満をそらすため「開放中国」という仮面をつけて海外への窓を開けているだけであり、支那の正体は云わば「笑顔のファシズム」である。東トルキスタンに代表される惨状は、断じて内政問題ではなく、国際的な人権問題であり、前述したように人類への挑戦状である。日本政府は人権蹂躪を根絶すべく全世界に働き掛けるべきである。日本国憲法の前文に「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいとおもう」とあるが、支那の行為はまさしく専制であり、圧迫ではないか。このような事実を眼前に突きつけられても親支・韓・朝に現を抜かず左翼はもとより、日本政府は腰を上げようとしないばかりか、一部の政治家を除いて「日中友好

こそが最重要課題である」として交流を進めようとしているが、果たしてそれが本当に国益に適う事なのだろうか、断じて否である。国家としての在り方、国民としての姿勢を鑑みて、形振り構わず金儲けに走る財界人や利権を貪る政治家の言動を見るにつけ、日本人の誇りは何処に消えてしまったのか嘆くばかりである。同時に祖国復興の一念をもって、軍事大国・支那に対して毅然と立ち上がった東トルキスタンの人々の勇気を称え、人権蹂躪を大規模に且つ現在進行形で続けている支那の仮面を剥がし、「開放中国」の卑しくて狡猾で、醜くて欺瞞に満ちた正体を白日の下に晒し、支那の悪行の数々を糾弾し続けなければならない。願わくば東トルキスタンの決起が中共崩壊の序曲とならんことを・・・。

編集人 / 戸出蒼流

## 三島由紀夫「憂国の死」から35年

部屋の片隅で感涙に咽びながら走馬灯の様に消えていった遠い日を偲ぶ・・・



昭和45年(1970年)11月25日、ノーベル文学賞の最有力候補であった作家三島由紀夫が、陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地東部方面総監室で「日本の士」として壮絶な最期を遂げた。三島は陽明学を学び、吉田松陰に心酔し、信念に生き、その信念貫徹のために死を選択した。三島の生命を賭した決起と余りにも悲痛な訴えは生涯を通して私の脳裏から消え去ることはないだろう。三島の死は、当時ノンポリだった私にそれ程強烈な衝撃を与えたのである。三島は自衛隊員に向かって「あと30分、最後の

30分待とう。共に起って義のために共に死ぬのだ。(中略)我々は至純の魂を持つ諸君が、一個の男子、真の武士として甦ることを熱望するあまり、この拳に出たのである。」と腹の底から搾り出すような声で訴えたが、「心の死するを恐れず、ただ身の死するを恐れる」自衛隊員は蜂起どころか動こうとさえしなかった。今日の日本の頹廢は、まさに日本男児が日本男児たる矜持を忘れ、伝統的武士道精神を亡失したからに他ならない。

三島由紀夫は「憂国の死」を遂げる4ヶ月前「私の中の25年」という短文のエッセイを産経新聞に寄稿している。25年とは言うまでもなく大東亜戦争後の25年であり、その中に「私はこれからの日本に希望をつなぐことができない。このままいったら日本はなくなってしまうのではないか」という感を日ましに深くする。日本はなくなって、その代わりに、無機質な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜け目がない、経済大国が極東の一角に残るであろう。それでもいいと思っている人たちと、わたしは口をきく気にもなれなくなっているのである」という一節がある。三島は既に35年前、日本のおかれていた現状を危惧しているのである。さらにエッセイの冒頭にある「私の中の25年間を考えると、その空虚さに今さらびっくりする。私はほとんど生きたとはいえない。鼻をつまみながら通り過ぎたのだ。」という一文は、修辞を超えた三島の魂の叫びであったのではないかと思う。三島が「鼻をつまみながら通りすぎた」25年間よりさらに10年長い35年間が、あの「憂国の死」から経過した平成17年、日本人の矜持と日本人の魂を喪失した似非日本人は、皇室典範の改悪と占領憲法の存命に手を染めている。

三島由紀夫の「憂国の死」から日本は、国民が気づかないうちに徐々に亡国に向かって進み始め、バブル時代にその頂点に達した。そして今、日本人は日本人としての美德を失い、自ら魂の空白状態へ落ち込んでいる。その場しのぎと偽善に走り、汗を流して働くより楽をして金を儲ける状態に陥ってしまっている。この状態がこのまま続けば日本はさらにはっきりと亡国への道を歩くこととなり、三島の死は犬死となってしまう。「憂国の死」から35年を機に、国民の一人一人がもう一度、日本人の本質とは何か、日本人として何をなすべきかと自らに問題を提起して、真剣に見つめ直して行こうではないか。35年前、日本人の脳髓に雷鳴を落とした三島の死を無駄にしないためにも、そして60年前、命を懸けて国を護り給うた先達の御恩に報いるためにも、日本人と日本人のあるべき姿を欣求し、失われた日本人の誇りと魂を取り戻さなければならないと考える。今はその最後の時期に来ているような気がしてならない。

編集人 / 戸出蒼流